

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006 年 ～ 2008 年

課題番号：18500190

研究課題名 (和文) 戦前期中国東北部刊行日本語資料の書誌的研究

研究課題名 (英文) A Bibliographical Study of Publications in the  
Northeastern China before the Second World War

研究代表者 岡村 敬二

(京都ノートルダム女子大学 人間文化学部 人間文化学科 教授)

研究者番号：90310664

## 研究成果の概要：

この研究では、中国東北部で出版された刊行物のうち、日本支配下満洲時期に出版された雑誌の概要を明らかにしようとした。具体的には、この時期の出版法制や官庁刊行物・総合雑誌の一覧を作成し、解題や目次一覧を作成した。その結果、満洲の出版法制についてはその輪郭を提示できた。また大衆誌で、昭和3年から終戦期まで刊行された『月刊撫順』『月刊満洲』の解題や目次一覧も作成し、それらを研究成果報告書(198p)として公刊した。満洲期の雑誌刊行事情の一端を明らかにし得たと考えている。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
年度			
18年度	1,200,000円	0	1,200,000円
19年度	1,000,000円	300,000円	1,300,000円
20年度	1,300,000円	390,000円	1,690,000円
総計	3,500,000円	690,000円	4,190,000円

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：情報学・図書館情報学 人文社会情報学

キーワード：満洲 出版法制 検閲 目次 月刊満洲 月刊撫順 新京図書館 竹中英太郎

## 1. 研究開始当初の背景

我が国が戦前期に占領していたいわゆる「外地」における日本の諸活動についての研究も、近年少しずつだが進展してきた。しかしながらこれらの研究は文学や文化財、経済領域、植民地図書館など、限定された分野でなされることがあっても、研究の基層となすべき資料面での書誌的で総体的な研究についてはまだまだなされ

ておらず、その基盤整備も十分とは言えない。

本研究を開始する時期のこれら「外地」の研究事情を見ておくと、たとえば研究雑誌としては、1990年代後半になり、日本植民地教育史研究会運営委員会『植民地教育史研究年報』(1998-)、東アジア近代史学会『東アジア近代史』(1998-)などが刊行され、『朱夏』『彷彿月刊』などでも特輯が組まれたりしていたが、外地

の出版関係についてのまとまった論述はまだない状況であった。

2000年にはいり、科学研究費助成の研究においては、松原孝俊「台湾・朝鮮・満州に設立された日本植民地期各種図書館所蔵日本語古典籍の書誌的基礎研究」(2000-2001)、松野陽一「旧植民地所在日本書籍の重点資料の本文研究と総合解題目録作成についての研究」などの研究が進み、2007年には中国において、『中國館藏滿鐵資料聯合目録』も刊行されるが、科研の研究は主として古典籍であり、また目録についても中国に遺された蔵書群のそれである。つまり当時に外地で刊行された日本語出版物の総合的な研究というわけではない。

そんななかで研究代表者は、「日本支配下中国・「満洲」における出版文化の諸相」(特定領域、2001-2004)により、主として満洲地域における出版事情、出版史について概括的な研究をおこなった。しかしながらここでもまだ逐次刊行物を含めた日本語刊行資料の研究といった具体的な研究にまでは及ぶことができなかった。

こうした研究状況のなかで研究代表者は、本研究における最終的目標を、これら「外地」出版物の全容を明らかにする点に置き、そして今回の研究課題にあつては、ひとまず戦前期の中国東北部(以下「満洲」と呼称する)において出版された刊行物のうち、とりわけ逐次刊行物についてその出版概要を解明することとしたのであった。

## 2. 研究の目的

こうした研究の最終到達地点を確認した上で、この研究においては、具体的には、出版活動の基礎となる「満洲」での出版法制・出版事情を明らかにしながら、「満洲」で刊行された逐次刊行物のうち、従来の研究では取り残されがちであった「満洲国」官庁刊行物、研究雑誌・総合雑誌についてその目次一覧の作成と個々の雑誌の解題作成といった書誌的な作業をおこない、総合

的な研究の端緒となることを考えた。

戦前期「満洲」においては、満鉄をはじめ「満洲国」各部局、国策企業や大学・研究機関、さらには文化機関や民間出版社にいたるまで、想像以上の出版物が刊行されている。それら「満洲」時代の出版物は「満洲国」の消滅後、当時日本から移入した資料とともに、戦後中国側に接収されて現在中国各地の図書館に所蔵されている。ところがこれら「満洲」で出版された資料群、とりわけ「満洲国」の出版物に関しては、この満洲国が「独立国」であったことから、当時日本国の収集や書誌作成責任の範囲にはなく、また現在中国においては「偽満期」の出版物とされて、資料群は保存され聯合目録が刊行されてきたものの、それ以上のつまり「刊行物総目録」といった総合的な書誌作成の営為はなされてこなかった。つまり、「満洲国」に関しては、1932年3月の建国から1945年8月の終戦まで約13年半の間に当地で刊行された出版物の実態は不明にして、全出版物の把握などは誰もが責任を持たぬままに現在に至っているのが実情なのである。こうした観点に立って、この調査研究では、「外地」刊行の出版物のうち、「満洲」「満洲国」の出版物実態を明らかにし、逐次刊行物の刊行目録の作成や目次総覧の編輯など、書誌的な基盤の整備を目指すことで、今後日中両国の情報環境および研究活動進展の一助にしたいと考えたのであった。

研究の基礎となるのは何といっても資料である。どの研究領域においても戦前期日本の歴史的事象を研究するにあたっては、戦争や「外地」での活動はずすことはできない。その研究のための「資料」を考えたとき、たとえば我が国で刊行された出版物に関しては戦前の帝国図書館がとりあえずその収集の任にあたってきた。さらに大学図書館や公立図書館においても資料的な蓄積があり、出版年鑑や刊行物目録、雑誌記事索引に関して不十分ながらも整備されてきた。しかしながら外地で出版された刊行物に関

しては、先に述べたように、まったく放置されたままである。そしてまたここで強調しておきたいのは、これら外地で刊行された出版物は現にそれぞれの国それぞれの地域において「保存」されているという事実である。このことは、公的機関のだれもが書誌的な責任を持たないままに書誌的な意味では放っておかれた資料であるとしても、書誌的・文献的な作業さえ整備されれば個々の研究にとって有用な資料として利用が可能となるということを意味している。現在それぞれの国に保存されている資料も劣化がすすみ、また日本側の歴史認識など政治的な事情から閲覧事情も規定されるという厳しい調査環境のなか、こうした戦前期外地での活動を客観的かつ総体的に検討するためにも、これら資料を基礎においた書誌的な作業が是非とも必要とされていると考える所以である。

このような営為は、現在では書誌作成責任機関つまり国立国会図書館が組織的に行っているものでもあり、本研究のようなかたちで個人がおこなうことによって成し遂げられるべくもない作業である。しかしながら、こうした組織的な作業を行う必要があることを訴えながら、研究者が個別に作業を展開するなかでもいくつかの知見が得られるであろうと考えつつ、ともあれ「満洲」時期に刊行された逐次刊行物のなかからいくつかの雑誌を選び、刊行経緯や内容についての解題を示しつつ、目次総覧を作成していくという作業に取り掛かることとしたのである。

作業はまだまだ緒についたばかりであり、こうした作業は今後も継続して取り組んで行かねばならない。そしてまた、現在では目次一覧の作成など活発な研究がなされている文学方面での書誌的研究だけでなく、他の分野での雑誌についても、書誌的な資料基盤整備が進展していくとよいと考えている。

### 3. 研究の方法

本研究での作業の進行にあたっては、たとえ

ば目次一覧についても、刊行雑誌すべての存在を明らかにして目次一覧を作成するということは望むべくもないことであり、とりあえず日本に所蔵が少ない雑誌のうち、現時点で見ることができたものについて、その一部分であってもその営為の蓄積を図っていくという観点から作業を進めていった。つまり作業の途上であっても得られた結果を順次世に出すことにより、将来にわたって作業をシェアしながら全体像を形成していくといういわば「分担目録」的な考えから作業を進め、それらを発表していくという方法をとったのである。

資料の保存や所蔵状況などを勘案したときこうした方法をとらざるを得ないという制約上の問題からだけでなく、研究代表者が長く図書館員として仕事をしてきた、その習いによるものといってもいいかもしれない。それはまた、図書館現場から書誌的な作業を通じて、各領域の研究活動に貢献できる有力な方法のひとつであるとの考えによるものでもある。こうしたことから、書誌作成責任に起因するいわば「全国書誌」とでもいべきものを作成することを夢想しつつ、具体的現実的には、取り上げた雑誌の解題や目次一覧を提示することでその雑誌の刊行事情や背景などを明らかにしていこうと考えたのである。

逐次刊行物の書誌的研究という目的を達成するために、その計画および方法については、次の3段階に区分して進めた。

第1は、新聞・雑誌・年鑑など逐次刊行物すべてについて、その刊行実態、書誌的事項を明らかにするべく、さまざまな研究領域の基盤を整備するということである。具体的には、それぞれの刊行物の名称・刊行者・出版地・創刊年・刊行頻度・時事的問題掲載の有無などについて一覧表を作成することに努めた。満洲において刊行された逐次刊行物の総体を確定するための第一歩というわけである。それらのうち、この研究の対象とするものについて、日本・中国における所在を確認していった。各種書誌に記載のある

ものは当面それを記載し、現地で確認したものを追記した。一部すでに複製されているものもその情報を付記した。

第2は、これら逐次刊行物のうちの雑誌について、他領域で利用頻度が高いと思われる総合雑誌や満洲国官庁各部署の広報誌、満洲国策会社の機関紙、さらには図書・文献関連雑誌や図書館広報誌を中心に、所蔵機関に出向きその記事内容を調査し、順次それらの解題および雑誌目次一覧を作成した。

第3は、こうした作業を通じて得ることのできた知見を研究論文としてまとめるという作業である。またここでは、研究論文だけでなく、とりわけ中国での資料調査の困難さを研究者と共有化するために、「訪書記」という形式で、調査経過を報告するという作業も重視した。今後の研究が効率的に進んでいくことを念じてのことである。

こうした図書館的な方法により、戦前期中国東北部で刊行された刊行逐次刊行物の概要を把握するために、いくつかの逐次刊行物を取り出して解題を附し目次一覧を作成していった。またこの中国東北部の出版物を統制している出版法制についての論考もふくめて、研究の過程で得ることのできた知見を論文としてまとめ、さらに所蔵機関に出張したおりの状況を「訪書記」として報告文を作成し、随時、研究代表者の大学ホームページに掲出していった。

#### 4. 研究成果

研究成果として、最終年に『研究成果報告書』（2009年3月 198頁）を刊行することができた。以下、この研究成果報告書について述べることで、研究成果の報告としたい。

（なおこの『研究成果報告書』は、国立国会図書館関西館および本学図書館に寄贈している。）

この研究成果報告書は、研究論文、満洲時期に当地で刊行された雑誌の解題と目次一覧、そして「訪書記」とから構成されている。当初、各年次の『満洲年鑑』などに収載される「定期刊行

物一覧表」や満洲国立中央図書館籌備処編「満洲国普通出版納本月報」などを一本化することで、「満洲および満洲国時期刊行逐次刊行物一覧」を作成して公刊することをめざし、一本化までの作業は行ったのだが、まだ考証が足らぬと考えてこの報告書に収録することを断念した。ただその概容はつかむことができおり、リストもおおむね出来ており、いまだ少し考証を加えて発表にこぎつけたいと考えている。

そのかわりというわけではないが、「満洲国」において刊行された出版物を概観するのに、現在みることができる出版物目録を集大成した『満洲国出版目録』（全8巻、金沢文圃閣）を編纂した。そしてその編輯過程で作成することのできた解題を第一部に再録した。また研究協力者である米井勝一郎からは、楠田五郎太についての論考が寄せられた。「研究の目的」で少しふれたことだが、「満洲」時期刊行の出版物の書誌的な資料基盤整備といったこの作業の次に展望できる方向性のひとつとして、それは研究者にとって各人各様であろうが、米井の向かう方向性がこの論文には示されているというべきであろう。

今回、遼寧省図書館でみることができた雑誌のうち、『月刊撫順』『月刊満洲』の目次一覧の作成作業には多くの時間をさいた。そしてこの調査の過程で、幻想の挿絵画家 竹中英太郎と「満洲」との関係の一部を明らかにすることができた。それを、岡村敬二「竹中英太郎と『月刊満洲』」で紹介し、あわせて、竹中英太郎「満洲へ行きたがる一挿絵画家への告別の辞」の全文を、著作権継承者金子紫氏のご好意で掲載することができた。金子氏には心よりお礼を申し上げたいと思う。

第二部は目次一覧である。米井勝一郎による『新京図書館月報』の目次一覧をはじめ、岡村による『満洲学報』『興農』『馬疫研究處研究報告』『満洲講演』『満洲寫壇』『月刊撫順』『月刊満洲』の解題および目次一覧を掲載した。

岡村が作成した目次一覧にあつては、その雑

誌の性格をあきらかにしたいがゆえの作業として解題に力点が寄っているものや、まだまだその全体像が明らかになっていないものも含まれているが、「研究の目的」で述べたように、これらの作業をいわば蓄積型、積み上げ方式と考えて、その一端を示すことにしたのである。

第三部は「訪書記」である。これは、代表者が勤務する大学の大学院ホームページに随時掲載したものである。現在の中国での資料閲覧事情や複写の実態を考えたときに、できるだけ最新の調査状況を報告おけば調査をおこなうにあたって役に立つかと考えてのことである。そしてここには、この訪書の過程で見ることができた刊行物について紹介する記事も付載した。

また満日文化協会についての論考(『日満文化協会の歴史』)において詳述したことだが、協会創設にあたって日満間の事務折衝を受け持ち、協会創設後は理事の役職に就いて活動した水野梅曉が、戦後に名古屋の覚王山日泰寺において釈迦と玄奘三蔵の遺骨対面式を挙行し象に乗って更新した記事の紹介文も収録した。

そして訪書記とあわせて、今回この科研で訪れることのできた瀋陽という都市の印象記も収録した。それは、代表者がこれまで訪れることのできた中国の都市のうち、「満洲」時期の、大連と新京(現長春)や奉天(現瀋陽)、そして哈爾濱など、これらの都市の比較といったことも検討してみたいと考えているからである。

もとより十分なものではないが、「満洲」時期の出版物の全体像を把握するための端緒となればと念じて研究を進め、ここにささやかながら報告書を刊行した次第である。

以下この『研究成果報告書』の目次を掲げておく。下線のものは研究代表者の属する大学ホームページ

(<http://www.notredame.ac.jp/ningen/study/study2.htm>)に全文を掲出している。また著者名のないものはすべて研究代表者(岡村敬二)の

ものである。

『研究成果報告書 戦前期中国東北部刊行日本語資料の書誌的研究』

平成 21 年 3 月

(研究期間 平成 18 年度—平成 20 年度)

(研究課題番号 18500190) 科学研究費補助金 基盤研究(C)

198p

目次

はじめに—研究の目的と研究経費…1

I. 研究成果の概要…5

II. 研究成果

1. 論文

(1) 満洲国の出版法制と出版目録…9

(2) 青年図書館員聯盟の図書館革新運動と「ファシストの公共性(圏)」—楠田五郎太の「動く図書館」を中心に 米井勝一郎…21

(3) 竹中英太郎と『月刊満洲』…29

付載:竹中英太郎「満洲へ行きたがる—挿絵画家への告別の辞」 竹中英太郎…33

2. 目次一覧

(1)『新京図書館月報』目次一覧

米井勝一郎…41

(2)『満洲学報』目次一覧 …52

(3)『興農』解題および目次一覧…59

(4)『馬疫研究處研究報告』解題および第一号目次…62

(5)『満洲講演』解題および目次一覧…66

(6)『満洲寫壇』解題および目次一覧…71

(7)『月刊撫順』『月刊満洲』解題および目次一覧…82

3. 訪書記・資料紹介

(1)「瀋陽市図書館訪問記(2006年8月)」

…175

資料紹介1『満洲国 大学専門学校

入学試験問題・解説 附、入学須知』

資料紹介2『新京図書館月報』

資料紹介3『東北図書館図書分類表』

- (2) 水野梅暁企画にかかる名古屋覚王山日  
泰寺での釈迦と玄奘三蔵の遺骨対面  
式について…185
- (3) 遼寧省図書館訪書記(2007年8月)  
…188  
資料紹介『塔影』創刊号 満洲国立高  
等農業学校校友会
- (4) 旧大原農業研究所(現岡山大学資源生  
物科学研究所)訪書記(2008年2月)…193
- (5) 遼寧省図書館訪書記(2008年8月)  
…195  
奉天四塔巡覽

5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担者  
及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)…上記「研究の成果」に記  
述した『研究成果報告書』以外の論文を記載す  
る。

- ① 岡村敬二「満洲国の文化政策と京都の学者  
たち」「日満文化協会の創設」「内藤湖南と満  
洲」「京都の美術家と満洲国」、円山宏 伊從勉  
高木博志編『みやこの近代』、思文閣出版、  
229-236p、2008年3月、査読なし
- ② 岡村敬二「明治大正における印刷・メディアの  
役割」(パネラーとしての発言)、磯部彰編『東ア  
ジアの出版と地域文化:むかしの本のもものがた  
り』、汲古書院、p165-191、2008年3月、査読な  
し
- ③ 岡村敬二「満鉄図書館」、『別冊 環 12 満鉄  
とは何だったのか』、藤原書店、p242-243、  
2006年11月、査読なし

[学会発表](計3件)

- ① 京都ノートルダム女子大学大学院人間文化  
専攻「文化の航跡」研究会(於本学 平成20年1  
月31日)において「満洲国」期の〈大連・奉天・  
新京〉三都比較論 一創出された文化資源の諸  
相から」を発表。
- ② 近代古都研究会(於京都大学人文科学研究

所 平成19年6月16日)において「蔵書、その  
時代の過ごし方―「満洲」に遺された書物を中  
心に」を発表

- ③ シンポジウム「東アジアの出版と地域文化」  
(於パシフィコ横浜会議センター 平成18年8月  
6日―7日)において、「日本近代編「明治大正  
における印刷・メディアの役割」のパネラーとして  
参加

[図書](計3件)

- ① 岡村敬二(編輯)『満洲国出版目録』全8巻平  
成20年8月から 金沢文圃閣
- ② 岡村敬二 研究成果報告書『戦前期中国東  
北部刊行日本語資料の書誌的研究』(研究期間  
平成18年度―平成20年度)平成21年3月  
198p
- ③ 岡村敬二『日満文化協会の歴史―草創期を  
中心に』平成18年6月 私家版 302,14P  
この内容の細目は上記「研究の成果」を参照

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡村 敬二 (OKAMURA KEIJI)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・  
教授

研究者番号：90310664

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：